

---

## 棺のクロエ1.3 機神狩り

義忠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

棺のクロエ 1・3 機神狩り

### 【Nコード】

N 8 6 9 8 W

### 【作者名】

義忠

### 【あらすじ】

辺境の空を飛ぶジャイロ機の機長グエンの下に、ヤクザ者のファンが訪れた。兵隊崩れの重武装の手下たちと大量の武器を乗せて飛べと彼は命じる。すべてはたったひとりの男を殺すために 辺境の大地に繰り広げられる機械幻想の外伝！

マシーナリイ・ファンタジー

## 0（前書き）

ご無沙汰しております。

いろいろな宿題を抱えている身ですが、とりあえずこの夏の新刊『棺のクロエ』の最新外伝をお届けします。

今回はちよつとハードボイルド調で、登場人物はオーバー30のおっさんばかりですがw、その辺の需要もどこにはあるのではないのか、と。

まあ、これ以外にも『棺のクロエ』の外伝はあるのですが、その辺はおいおいと。

ではどうぞお楽しみください。

『……よりロックバード。現在位置はどこだ？』

「こちらロックバード、クラバ涸川<sup>ワジ</sup>を越えた辺りだ。到着予定時刻は一五分後」

『急いでくれ。患者の出血が激しい』

「何とか持たせろ。医者と一緒に輸血パックも積んできた。無駄足踏ませるんじゃないぞ！」

言い終えると、ゲン・ヴァン・トゥアンは操縦席<sup>コックピット</sup>から背後の客室<sup>キャビン</sup>を振り返って怒鳴った。

「先生！ 患者の容態がヤバイらしい。現場からの通信を今そっちに廻す。応急処置の指示をしてやってくれ！」

『判った！』

機内を満たす爆音に負けじと、ヘッドセットを押さえながら壮年の医師が叫ぶ。

それをヘッドセットのスピーカー越しに耳にしながら、通信の切り替えボタンを叩いて、外部通話を機内通話の回路に接続する。

事故を起こして重傷の患者を抱えた鉱山現場と、医師の切迫した会話を聞き流しながら、周囲の状況と計器類を素早くチェックする問題ない。じっくりと確認したわけではないが、飛行に影響の出そうな違和感を感じられない。

機体上部の双発エンジンも順調だ。エンジン音にも機体を震わす振動のリズムにも、計器の示す回転数や温度にも異常はない。おかげで機内通話なしでは、隣のシートに座る副操縦士と話もできない。大戦中も戦場を飛び廻っていた軍払い下げのこの老嬢は、今日もお意気軒高でけたたましい。

ちなみに、こうしている今現在、この機の操縦桿は副操縦士が握っている。二歳を出たばかりの地元で雇った若者で、操縦桿を任せるのはこれで二度目だ。正規の訓練は受けていない。ゲンが手

ずから、飛行に必要なこと仕込んでいる最中だった。いずれ中原<sup>ハートランド</sup>にある正規の飛行学校に送り込んでやらねばならない。とりあえず今は、現場度胸を付けさせるため操縦桿を握らせている。

まだ緊張が解けないのか、肩に力が入り気味なのが見て取れた。だが、涸川<sup>ワジ</sup>沿いにまっすぐ飛ばすだけなので、特に心配はいらないだろう。

グエンは改めて機外に目をやった。渴ききつて醜い地肌をさらす涸川<sup>ワジ</sup>とその兩岸の急峻な斜面が急速に後方へと流れてゆく。わずかに残った水分にしがみつくように、まばらに草や痩せた木々が生えていた。色みらしい成分はそれくらいで、後は色の抜けた薄茶色の乾いた大地が続いている。

ぱっと見、対地高度はそれほど高くはない。手を伸ばせば届きそうな高さ。ちよつとでも操縦を誤れば、すぐにでも大地に激突しそうな近さだ。既に標高が高く、大気も薄いため、双発エンジンを積んだこの機体でも、あまり対地高度は高く取れない。薄い大気を圧縮してエンジンに送り込む高圧過給器<sup>スーパーチャージャー</sup>などを積んでいないということもあるが、そもそも機体上部の回転翼<sup>ローター</sup>を回転させ、大気を掻き廻して浮力を得るジャイロ機にとって、高高度飛行は苦手な領域なのだ。せめて地表近くの比較的濃い大気を求めて、地を這うように飛ばざるを得ない。

だが長年の経験から、この程度の対地高度であれば多少のトラブルがあつてもどうにかなると、グエンは踏んでいた。突風やエンジン不調などのトラブルが発生しても、この高度なら対処の時間はある。それで稼げるのはほんの十数秒程度の時間だが、もっと低い高度で、目の前で対空砲の近接信管に炸裂されたことだってあるのだ。勿論、戦時中の話だが。あの時だって何とかなったのだから、どうにもしようはあるだろう。そう、ふてぶてしく肚<sup>はら</sup>で嘔<sup>うい</sup>く。

つまり、すべて順調。問題なし。<sup>ノイプロブレム</sup>

『機長、涸川<sup>ワジ</sup>が終わります』

「了解」

副操縦士に操縦桿を預けるのは、涸川<sup>ワジ</sup>が終わるまでという約束だった。ここからしばらくは、より複雑な地形の溪谷地帯に入る。それを抜ければ、目標である露天掘りの鉱山が見えてくるはずだ。

「操縦桿をこちらに渡せ」

コ・ハブ・コントロール

『操縦を渡します』

アイ・ハブ・コントロール

「操縦を受け取った」

サイクリック・スティック

正面に掴む操縦桿がぐつと重みを増す。右手は出力桿<sup>コレクティブ・レバー</sup>に沿え、じわりとスロットルを開く。

機体がぐつと浮かび上がり、尾根をひとつ越える。

「……………」

毎度のことながら、この瞬間だけはあまりいい気分はしない。

戦時中、兵隊と武器を詰め込めるだけ詰め込んで、こうした溪谷地帯に送り込むのがグエンの日課だった。電波警戒機<sup>レーダー</sup>を警戒して高度は取れない。元より積載オーバー気味の機体にそんな能力はない。稜線と溪谷の隙間を縫うようにして這い進み、尾根をひとつひとつ越えて、敵の後方へと忍び込む。だが、こちらの手の内は敵も先刻承知だ。うかつに飛び込んだ谷間には、鋼鉄の阻塞ワイヤーが張られて、引つかかったらそこで終わり。そこを抜けたら、地面が爆発してるんじゃないかと思うくらいの濃密な対空砲火。色とりどりに輝く曳光弾が、アイスクャンデーのような尾を引いて、自分めがけて一斉に突っ込んでくる。事前の砲爆撃であらかた片付いていと豪語していた参謀の戯言<sup>たわごと</sup>が、事実だったためしはない。

重い機体を左右に振り廻してそれを避ける。直撃を回避しても、>同盟くの対空砲弾は弾頭が機体に近づくだけで炸裂する近接信管付きだ。機体のあちこちに砲弾の破片が当たって、カンカンと耳障りな音を立てる。

隣機が直撃を喰らって火だるまになる。昨夜、カードで貸しを作ったばかりの同僚が生きながらに焼き尽くされんとする断末魔が、ヘッドセット越しに流れ込む。ああ、畜生。これで貸した金を回収しそこなった。それ以上は考えない。戦友の死を悼むのは、自分が

生きて帰ってからだ。目の前の操縦にだけ集中する。

そうこうする内に、びびった客室キャビンの新兵が小銃ライフルの引き金を引く。

畜生、畜生、畜生。お客さん、静かにしてくれ。さもないと、どいつもこいつもこの場で全部放り出すぞ　！

『機長……？』

「……大丈夫だ」

何事もなかったかのようにグエンは告げ、出力桿コレクティブ・レバーを押し込んで更に機体を上昇させる。

時折訪れる一瞬のフラッシュバック。首筋に重い汗が吹き出して、インナー下着が肌に張り付くのが判る。それを副操縦士に気取られぬよう、いつもどおりの態度を装って操縦に専念する。

終わった話だ。もう五年も前に戦争は終わっている。鉄と砂で血を灌そそぐような凄惨な戦場だったこの>帝国<西方辺境領北部山岳地帯の空も、今では対空砲火もない、阻塞ワイヤーもない、平和な日常の空へと戻ったのだ。自分も軍の任務ではなく、民間会社のいち操縦士パイロットとして操縦桿を握っている。

それは言祝ことほぐべきことだ。こうやって平和な空を飛んで、若者の育つ姿に目を細め、地上に降りれば整備と事務処理に追い廻されながら日々を過ごし、ゆるやかに老いてゆくことに感謝をすべきだ。そうできなかった戦友たちのためにも。

……それなのに、何故、自分は未だにあんな悪夢を振り払うことができないのだろう。

それは平和な「この空」と血塗れの「あの空」が、どうしても地続きの「同じ空」であるような思いを、拭い去ることができないからだ。

それが何故なのか自分でも判らない。戦場への郷愁か、死んだ戦友への贖罪の意識か。

判っているのは、多分自分は一生、この感覚と付き合い続けるのだろうという、確信めいた感覚だけだ。

それをどう折り合いつけるかというひとつの回答が、グエンにと

つての今の自分であり、この仕事だった。

心拍がいつもの勤務時の水準に戻るのが判る。もう大丈夫だ。尾根をもうひとつたつ越えれば、目的地もすぐに見えてくるだろう。普段から資材の運搬や今日のような急病人の搬送で何度も飛んだルートだから、どのタイミングで何が見えてくるかまで、ばっちり頭の中に叩き込まれている。

と、その見慣れているはずの視界に、かすかな違和感があった。

人間……？

前方　グエンがこれから越える尾根の上に、ひとりの男が立っていた。遠くからなのであまりよく見えないが、ジーンズに大戦中には空軍兵が好んで着ていたようなボマージャケット。この時期の標高では、気温を考えるとあまりお勧めできない出で立ちだ。やや痩せぎすに見えるのは長身なためか。真っ白に色の抜けた長い髪が目の前を被っていて、浅黒い肌の表情は読み取れない。山歩きの装備の類も見当たら<sup>たくい</sup>ず、ただ尾根の上でひとりで佇<sup>たたず</sup>んでいるようだった。

だが視線はまっすぐに、こちらを見ている　そう感じた次の瞬間には、機体は男の頭上を航過していた。

振り返って男の姿を確認したい衝動に一瞬駆られたが、すぐに抑え込む。何の必然性もない。ましてや、戻って確認などできようはずもない。この先で重症の患者が待っているのだ。

グエンは気持ちを切り替えて、男の存在を思考から追い出した。現在時刻を確認し、残燃料やエンジン状況を再度チェック。現地に到着後の機材や人員の搬入搬出の手順について、事前の打ち合わせ内容を副操縦士に読み上げさせる。

現地に到着すれば、即座に患者を搬入して離陸だ。エンジンも回転翼も止めない。慌ただしく、しかし安全には細心の注意を払う必要がある。それだけに、飛行時より更に神経の集中が必要だ。

だから、この話はこれでおしまいだ。

グエン自身はそう、思っていた。



## 0（後書き）

え、本編中「ジャイロ機」という表現を使用していますが、こちらの世界での「ヘリコプター」と同等のものだと思ってください。「辺境でやさぐれたパイロットをしている主人公が、トラブルに巻き込まれる」というのは、もう冒険小説としてはベタベタのネタなんです、是非、そのベタさ加減をお楽しみください。

あまり一般には理解されないのだが、大抵の航空機は飛んでいる時間より地上で整備している時間の方が長い。

本来、飛ぶはずもない鉄とジュラルミンの塊を強引に空に浮かべているのだから、相応の無理が機体やエンジンに掛かる。具体的には、熱と振動。それが溜まりに溜まって、放置しているとエンジンが焼き付き、機体そのものにも応力負荷が加わって、ある日、ここがぱつきりということになりかねない。

そういった諸々の無理をどうにか誤魔化し、緩んだ器具を締め直し、消耗した部品やオイルを交換し、次の飛行に耐えられる状況に持ってゆくのが整備の仕事だ。

グエンが社長兼操縦士パイロットを務めるティエンソン航空でもその事情は変わらず、社保有の唯一の機体であるこの双発ジャイロ機の機付整備長の役職も、彼自らがありがたくも務めていた。勿論、彼が兼ねているのはこれだけでなく、事務局長から職員の教育係まで、すべてが彼の仕事だった。つまり、社長ひとり、社員ひとり、たまに事務の手伝いに役所から派遣されるオバサン職員がひとりというのが、ティエンソン航空の全職員だった。

そんなわけで、本社機能のある申し訳程度の広さの空港　垂直離着陸のできるジャイロ機用の猫の額ほどの離着陸パッドを、グエンはそう言い張っている　そばに建てられた整備用の格納庫で、エンジンの熱が冷めるやいなや、アクセスパネルを開いて、グエンは機体状況を確認し始めた。

帰りの飛行の最中から、エンジン音に交じる微かな異音と振動異常に気付いていた。原因がどこかも当たりはつけていたので、まずその手当てに取り掛かる。

「冷めた」と言っても、程度の問題でしかない。素手で触れれば火傷は免れない熱さで、分厚い耐熱手袋は欠かせない。

大きな脚立の上に立って作業に熱中している内に、格納庫に誰が入ってきたことに気付いた。たぶんさつき倉庫から部品を取ってくるよう頼んだ、副操縦士のデインだろう。

「どうだ？　頼んだ部品は倉庫にあったか？」

「やあ、精が出るな、大将！」

「……………」

よく通る大きな男の声。どこか飄<sup>ひょう</sup>げたニュアンスを含んではいたが、ある種のはつたりとしてこうした声を出すことに慣れているような、芝居がかった印象も感じられた。

振り返ると、サングラスの小柄な男がこちらを見上げて笑みを浮かべている。歳の頃はグエンと同じ三〇前後といったところか。襟元にファアの付いた皮のジャケットを着込み、両腕をポケットに突っこんでいる。

ふてぶてしい面構えといかにも高価そうなそのジャケットで、この辺の鉱<sup>たぐい</sup>区で一山当てようと目論む山師の類かと当たりをつける。あの連中なら、事前の予約もなしに、いきなり格納庫に押しかけるくらいの無礼をやらかしても不思議じゃない。

それでも一応、名前ぐらいは確認すべきかと、グエンは訊ねた。

「どちら様ですか……………」

「あんたが社長さんかい？」

グエンの問いを無視して、男は逆に訊ねた。

「……………そうですが。それで、そちらは一体……………」

「この機をチャーターしたいんだがね」

またしてもこちらの問いを無視して、勝手な要求をかぶせてくる。グエンは軽い頭痛を覚えて眉間を揉んだ。埒<sup>うち</sup>が明かない。グエンは整備用の脚立から地上に降りた。

「あんた……………」

「金ならあるぜ。現金でも持ってきてきちゃいるが、足りないなら口座を指定してくれば、後で振り込ませる」

「そんなことを訊いてるんじゃない！」　苛立ちを隠さずにグエンは

告げた。

「あんた、誰だって訊いてるんだ！」

その怒声に、男は一瞬、驚いたように黙ると、やがてサングラスを外し、ややたれ目の瞳に人懐っこい笑みを浮かべて、右手を差し出した。

「いやあ、すまんすまん。どうも気が急いじまってね。俺の名はフアン・フィン　ハートランド　中原で経営コンサルティングを手掛けてる」

「……グエン・ヴァン・トゥアンだ。ここで社長と操縦士パイロットをやってる」

「よろしくな、社長！」

半ばうんざり気味に差し出されたグエンの手を馴れ馴れしく掴んで、フアンは激しく振った。そこから振り払うような印象にならないように気を使いながら、グエンは手を引いて訊ねた。

「それで、何の用でウチに來たんだ？」

「さつきも言っただろ。この機をチャーターしたい」

「目的は？」

「ハンティング  
狩りさ」

「ハンティング  
狩り」……？」

グエンは眉根を寄せた。何を言っているのだ、この男は……？

「そう。この辺はでかい獲物があるっていうからな。狩猟好きの取引先の社長さん方ご一行で、そいつを仕留めに行こうって算段さ」

「……いつの話をしてるんだ？」グエンは呆れたように言った。

「そんな獲物ものはいない。戦前のまだ自然のあつた頃ならともかく、今のこの辺りに狩猟の標的になるような大型動物なんかいるものか」

大陸を二分する超大国である>帝国<と>同盟<の高度に機械化された軍隊が、真正面から激突した先の大戦の末期に主戦場となつたこの辺りは、野山を覆う大自然もあらかた破壊し尽くされていた。滴るような緑に包まれた森林地帯は、重機と砲爆撃で掘り返され、陣地構築の資材にするのだと伐採された。終いには「敵に隠れられると困る」という、その存在自体が悪であるかのような理由で、積

極的に焼夷弾で焼き払われ、焼け跡から二度と木々が芽吹かないようにと枯葉剤まで撒かれた。

そうした彼我双方の「努力」の結果として、この西方辺境領は砂と岩ばかりの荒野と成り果てた。自然環境も激変し、残るのは僅かばかりの草木と、そこに生息する小動物ばかりだ。狩猟の獲物になるような大型動物など、どこを探してもいるはずもない。

「まあ、それならそれでいいさ」ファンは肩をすくめて言った。

「だったら遊覧飛行つてことでも構わない。せつかくここまで出張つてきて、手ぶらでお帰り願うわけにもいかんのでね」

グエンはつれなく首を振った。

「……生憎だが、飛び込みの仕事は受けていない」

「何だい、そりゃあ？」

「ウチの会社は、この辺の自治体と鉦山会社が共同で金を出し合っ  
て設立された会社でね。地元の需要が最優先。こうしている合間にも、いつ何時、事故や病人の搬送で呼び出されるか判らない。一見  
さんの客は紹介状持参で、数日前に飛行計画をあちこちに送って了解を得なけりやならない」

フライトプラン

「……面倒くせえ話だな。あんたが社長なんだから、多少は融通効かせられねえのかい？」

「雇われ社長にそんな権限はないさ。わざわざ出張ってくれたのに無駄足で返すのも何だから、市長には俺からも話を通してやる。そこから先は、そっちの才覚次第だ。そこで紹介状貰って出直してくれ」

「それじゃあ、困るんだ。それじゃあな……」

グエンではなく、背後の機体を見上げるようにファンは告げる。吊られるようにその視線を追いかけたグエンをよそに、いつの間にかファンの右手には黒い自動拳銃が握られていた。

「金が駄目なら、こういうのはどうだい？」

銃口をこちらに向けながら、ファンは愉しげに言った。

「何のつもりだ……？」

グエンは銃口の動きを慎重に追いながら言った。飛び掛かって銃を奪うことも考えたが、たぶんこの距離では難しい。自分には当たらなくとも、機体や格納庫内の可燃物に当たるのは避けたい。まずは向こうの出方を静観するしかない。

「落ち着いてるねえ。お宅も戦場帰りだったっけな。それなりの修羅場は踏んでるか」

戦場を飛ぶジャイロ機の機長に積み荷の兵隊との揉め事は日常茶飯事だ。勿論、銃口を向けられていい気分にはならないが、怯えてパニックする自分は自動的に切り離され、冷静に対処法を探ろうとする思考が動き出す。戦場帰りがどうこうという以前に、パイロットとは元々そういう人種なのだ。

「>帝国<空軍第1168戦術輸送飛行団山岳ジャイロ飛行隊所属、グエン・ヴァン・トゥアン少尉 いや、終戦間際の温情昇進で中尉で除隊だったか？ 整備兵の下士官上りとしちゃあ、上等な出世じゃないか。」

おまけに>帝国<銀騎士十字章を始めとした、飾るのに困るほどの勲章。資料を見る限り、出撃回数も対地撃破数も大したものだ。どうやったら輸送ジャイロで戦車を潰せるのか、今度教えてくれるか？」

「……………」

こちらのプロフィールはとくに調査済みらしい。何者だ、こいつ？ 勿論、「経営コンサルタント」なんかでないのは、拳銃を抜いた時点で明らかだ。だが、何で自分の戦歴なぞ知っているのか。別に自伝を書いて出版した記憶もない。記録の残ってる軍に繋がりのある人間だろうか。

「これだけの戦歴上げてりゃ、戦後も軍に残るなり、実家に戻っても勤め先は引く手あまただったろうに。あんた、こんな辺境（とろろ）で何をやってるんだ？」

「……余計なお世話だ」

「それもそうか」

ファンは軽く肩をすくめ、本題に戻った。

「この機体を借りたい」

「……何に使うつもりだ？」

別に知りたくもなかったが、時間稼ぎのために訊ねる。その場で拒絶してもよかったが、取引が成立しないと判断したら躊躇わず引き金を引きかねない剣呑な雰囲気、にやついた表情のファンにはあった。

「言つたろ。狩りに行くのさ」  
ハンティング

「わざわざこんなでかい機体を使つてか？ 近所にもっと小廻りの効く小型機を持つてる会社もあつたはずだ」

「知ってる。こいつでなくちゃ困る。だから、こうしてあんたの前に立つてる」

ディンはどうした？ そろそろ山ほどの部品を抱えて、あの若い副操縦士が格納庫に顔を出す頃合いだ。彼を捲き込むのは心苦しいが、それで一瞬でも奴の注意が逸れれば いや、それにしても遅すぎないか？

「……………」

こいつひとりではない、ということか。大人数、あるいは双発ジヤイロ機が必要なくらいの装備を抱えている。ディンはそいつらに捕まったと考えるべきだろう。……。

急速に険しさを増すグエンの表情を眺めながら、ファンは気楽な口調で言った。

「河岸を変えよう。ここは火気厳禁なんだったよな。そろそろ煙草が恋しくなつた」

## 1（後書き）

そんなわけで、前章の顔見世に続いて、主人公がトラブルに捲き込まれる回。

順調にハードボイルドのお約束展開を消化していますね。

次回もグエンとファンと駆け引きは続きます。

更新は来週9月25日（日）の予定です。  
ではまた。



「社長！」

「大丈夫だ。俺に任せておけ」

泣きそうな声を上げるデインに、グエンは務めて落ち着いた声で告げた。と言って、何か目処があるわけでもない。気休めには違いないが、それを口にするのも大人の務めではある。

ファンに急ぎ立てられるように格納庫横の事務所に辿り着くと、自動小銃で武装した屈強な男たちに囲まれて、デインが真っ青な表情で椅子に縛りつけられていた。男たちの人数は三人。ひとりは髪の毛の生え際が大きく後退してはいるものの、肌の色つやを見る限りグエンやファンとほぼ同年代。残りはまだ若い腕や脚のどちらかが機械化された機人<sup>マシーナリイ</sup>だった。

おそろくは、いずれも兵隊崩れ 構えている銃の持ち方に無駄はなく、張り詰めたような余計な緊張感もなかった。こちらがおかしな動きを見せれば躊躇なく引き金を引くだろうが、うっかり引き金を引くようなミスも犯しそうもなかった。

戦時中にならば場数を踏み、戦後もそれなりに継続して修羅場に身を置いてきた連中、と言ったところか。

しかも、これで全員とは限らない。

その辺のチンピラ機族の方がまだ扱い易かったが、贅沢の言える身分ではない。

さて、こいつらにどうお引き取り願うか、だが……。

「まあ、突っ立ってないで座れよ、社長」

内心で呻くグエンの胸中を知ってか知らずか、ファンは勝手に奥の応接シートにどつかと腰を下ろすと、拳銃を振って座るように促す。

「……………」

グエンは黙ってファンと向き合う形で、シートに腰を下ろした。

ファンは拳銃をこれ見よがしにテーブルの上に置き、胸ポケットからシガレットケースを取り出してタバコを口に咥える。手を伸ばせば奪えなくもない距離。勿論、実際にやれば、即座に他の男たちから蜂の巣にされるだろう。それが判つて、あえて拳銃から手を放したのだ。

ファンは余裕があるのをこれ見よがしに示すように、軍用オイルライターでタバコに火をつける。戦時中、前線の兵士達に配給された「糞を吸う方がマシ」と言われた銘柄。今時、こんなものをわざわざ吸う奴がいるのか。そのタバコの紫煙をさも美味そうに大きく肺に吸い込む。

「やっと人心地がつけたぜ。」

さて、改めてビジネスの話といこうじゃないか」

「……あんたら、何者なんだ？」

顔に掛かる紫煙に眉を顰めながら、グエンは訊いた。

「そうだな。改めて自己紹介をしておくべきだな。」

俺の名はファン・フィン、さっき名乗った通りだ。戦争中はあんな等のお得意さんだった」

「……空間機動歩兵……？」

一〇〇二〇人強の少人数の歩兵と、携行<sup>RPG</sup>ロケット砲のような小型の対装甲火器類、そして場合によっては軍用ヴィーグル一台ないしは軍用バイク数台で構成された一箇分隊を、ジャイロ機で敵前線の後方に送り込み、前線後方を攪乱、あるいは兵站線を寸断する>帝国<陸軍の殴り込み部隊。それが空間機動歩兵だった。

もっとも、その勇ましい任務と名前の割に、生還率は著しく低かった。

敵地に潜入しての最初の一撃まではいい。だが、攻撃に成功すれば、その時点で所在が露呈する。大した火力も機動力もない以上、後はほうほうの体で敵地を逃げ廻ることしかできない。そして得て

して前線を突破できずに包囲殲滅されて終わり。

しかも、敵もバカではないので学習する。前線を突破するジャイロ機を待ち受け、阻塞ワイヤーや対空火器で出迎える。それを突破して何とか地上に降りた兵士たちを、十字砲火が待ち受ける。

それでもそんな作戦が続けられたのは、末期の>帝国<軍西方辺境領北部戦線には、まともな装甲兵力が存在しなかったからだ。当時、>同盟<側の戦略的詐術によって装甲兵力のほとんどを南方戦線に抽出してしまった彼らには、取り残された山岳歩兵達と、導入直後で実用性を疑問視されつつ部隊集中運用の試験という名目で中央から押し付けられた大型ジャイロ機部隊のふたつくらいしか、まともな兵力は残っていなかったのだ。

絶望的なまでの巨大な物量と、火力の差。山を砕き、またた瞬く間に山脈をぶち抜いて高規格の軍用道路を開通する圧倒的な工作能力。

そうした巨大な>同盟<軍戦力に抗って、わずかなりと>帝国<軍側の戦力再編のための時間を稼ぐ捨石として、彼らは使われたのだった。

だから、特別にそのための訓練や研究を経て成立した部隊ではない。移動の足を失った歩兵をジャイロ機に押し込んで、後はなるようになれと無理やり出撃させたのが実態だった。しかもろくに生きて帰ってこないのだから、戦訓の蓄積も、戦術の洗練もない。前線の兵士たちの間で、自殺の代名詞として扱われたのも致し方ない面があった。

だが、結果だけを見れば、その犠牲は報われたと言っているだけだ。

北部戦線を突破して中原に雪崩込もうとした寸前に、>同盟<軍集団本隊は>帝国<軍が全土から必死に掻き集めた機甲軍集団によって捕捉された。そして後世の研究者から「神話」とまで称される数千台の戦車の入り乱れた大戦車戦の末、総司令官自身による「ハートランド我が軍は中原への突入衝力を失った」という宣言とともに、>同盟<軍の車列は祖国へと引き返して行ったのである。

その意味で、彼らは>帝国<を救ったと言っても過言ではない。そうした史家の評価は、未だに一般に定着しているとは言い難い。多くの戦場帰りの若者たちと一緒に、彼らもまた社会から「喰い詰めた厄介者」扱いを受けていた。

その現実を受け入れて生きる者もいれば、そうでない者もいる。戦後、「自分は空間機動歩兵だった」と名乗って愚連隊を組織し、あちこちで暴れている連中がいるとグエンも耳にしたことがあった。してみると、こいつらもその内のひとつか。

もつとも、それを聞いたからと言って、グエンに特に感慨はなかった。こちらにも生きるのに必死だったのだ。彼とても、世の中からすれば戦争帰りの無力な若者にすぎなかった。戦時中の任務で多生の縁ができたからといって、他人の人生にとやかく口を差し挟めるほど、お上品な人生を送っている自覚もなかった。

そのことをもって、ファンの方でもどうこうと拘こたわるつもりもないらしい。

ファンはさらりと話を続けた。

「勿論、経営コンサルタントなんかじゃない。ドウツクルンで一人ほどの手下てかを従えた組を構えている」

ドウツクルンは中原と西方辺境領の境にある都市の名前だ。元々、>帝国<の西方開拓の拠点であり、交通の要衝として発展してきた。鉄道のターミナル駅や高速道路が集中し、輸送飛行船の停泊所ステーションも早くから整備されてきた。

それがこの前の戦争では前線を支える巨大な物流拠点としてより一層、交通物流能力を増強され、一時は>帝都<に次ぐ人口五〇〇万に迫る一大物流都市と化した。

戦後、軍関連の需要がごっそり減り、西方辺境領の開発事業も一時停滞する中、遺棄された軍需物資や兵器、職を失った将兵などが流れ込み、一気に治安が悪化した。

今では事実上、地下社会に支配された都市として知られる。

もつとも、グエンもここに来る前に、一年ほどドウツクルンで暮らしていたことがある。旅費がそこで尽きたのだ。飲食店の皿洗いや倉庫の荷運びなどの仕事で日銭を稼ぐ内に、ジャイロ機のパイロットを募集する今の仕事にありついた。その時の印象では、巷間、言われるほど治安が酷いわけではない。昼間の間は、ではあるが他所ではともかく、ドウツクルンで一〇〇人ほどの規模の組織と言えば、ようやく中堅どころに手が掛かるうか、といったクラスの組織だ。戦争帰りの兵隊崩れであることを考えると、「新興の」という形容詞が頭についてもおかしくはない。

だが、そのヤクザが何の用で、こんな辺鄙な場所まで出張<sup>で</sup>ってきたのか……？

その疑念を読んだかのように、ファンは続ける。

「ドウツクルンでは、軍隊時代のツテもあって、武器から酒から女まで、手広く扱っててな。手向かう奴らもばつちりぶつ叩いて、よろしく愉しく過ごしていたんだが、ある日、昔の知り合いが訪ねてきて、全部ご破算になっちまった。それが、こいつだ」

ファンは胸元から一枚の写真を取り出して見せた。

「こいつは……？」

思わず写真を手に取る。長い白髪に浅黒い肌の若い男の横顔。雑踏の中を走る姿を、離れた場所から撮影したもの。だが、そこに映る男は、あの山中で見かけた青年とそっくりだった。

「……どこで見かけたことがある、って面だな？」

グエンの動揺をファンは目ざとく気づき、瞳を細めた。

「どこで見かけた？」

「知らん」

テーブルの上に写真を放り出し、グエンはそつけなく答える。

「まあ、いいさ」ファンはそれ以上、追及しなかった。

「こいつの行先は判ってる」

「……何をしでかしたんだ、こいつは？」

グエンは話題を変えるように逆に訊ねた。

「俺の手下<sup>てか</sup>を殺し、女房子供を殺し、『親』の呼んだ客まで殺してくれた」

「『親』……？」

「上の組織さ。ヤクザにだっていろいろしがらみってものがあつてな。まあ、そんなわけで、俺がこいつの首を持って帰らないと、組織は俺の首をその客筋に差し出すことになる」

話す内容は剣呑<sup>きわ</sup>窮まりない割に、フアン<sup>きわ</sup>の口調はどこか他人ごとのようにも聞こえた。自分の女房子供を殺された<sup>こたわ</sup>と口にしなから、そこにさほど拘りもないようだった。

「何者なんだ、こいつは？」

「ザン・セオ・キエム　ガキの頃からつるんでた幼馴染さ」

「それが何で……？」

「さあな、恨まれてるからじゃねえのかな」

「恨まれてる？」

訊ねた返すグエンにフアンは素っ気なく答えた。

「戦争中に弾薬庫ごと吹っ飛ばした」

「な……っ？」

「こいつは、俺がやってた武器や燃料の横流しを上層部<sup>うえ</sup>に密告<sup>さ</sup>しやがつてな。師団の兵站司令部から員数調査に将校が来るってんで、その前に弾薬庫を吹っ飛ばした。丸ごと吹っ飛ばしちまえば、武器や弾薬の数が少々、帳簿と合わなくなっただけで気にする奴はいねえ。ついでに、たまたまこいつもそこに居合わせちまった。それだけのことさ」

「……………」

絶句するグエンに、フアンはどうでもいいことのように付け加える。

「そうそう。あと、あいつの女を俺のものにしたってのもあつたっけな。あいつに殺された俺の女房<sup>めかけ</sup>ってのは、元々こいつの女房でね。そりゃあ、八つ裂きに仕あって飽きたらねえだろうよ」

うつすらと笑みさえ浮かべながら語るファンの口調に、グエンはぞつとした。まともじゃない。それがこのザンという男の所為なのか、端<sup>はな</sup>からそうだったのかは知らない。俺の知ったことじゃない。こんなぶつ壊れた男とは関わりを持つべきではないと、グエンの脳内警報が金切り声を上げていた。

だが、そう感じたからといって、この場がどうなるというものでもない。

グエンは声にならない呻きを呑み込んで言った。

「……それで、この男を狩るのに繰り出した兵隊運ぶのに、ウチの機体が必要だつて言いたいのか」

「まあ、そんなところだ」

「無理だ」グエンは素っ気なく否定した。

「そうかね？ 社長であるあんたの裁量次第だと思うが」

「そういうことじゃない」グエンは首を振って説明する。

<sup>フライトプラン</sup>「飛行計画を当局に出していない」

「別に気にする必要はないさ」

「そんなわけにいくか！ 戦争が終わったといっても、ここは国境近くの土地だ。＞同盟＜からの領空侵犯も、それに対する空軍の緊急<sup>ス</sup>発進も、日常茶飯事なんだ。飛行計画も出さずにジャイロ機がふらふら飛んでたら、速攻で空軍に撃墜されちまう」

「急病人が出たとも言えいい。あんた、今日も医者を載せて飛んでたじゃないか。ああいうのにも飛行計画<sup>フライトプラン</sup>つてのは、必要なかね」

「……急ぎの場合は略式で済むが、役場に確認の問い合わせがいく。ちよつとでも不審に思われたら、それで終わりだ」

「面倒な話だな」

鼻で笑うようにファンが告げる。

「だから　！」

「気にする必要はない、と言っただろう？ ヴー！ 地図を持って来い！」

先ほどの三人の男たちの内のひとり、髪の薄い男が航空地図をファンに手渡す。

ファンは地図をテーブルの上に広げた。山岳地帯を縫い走るように、飛行ルートと思しき赤い線が引かれている。

「何だ、これは……？」

「このルートを飛んでくれば、お咎めなしだ」

「は……？」何を言ってるんだよ

「そういう話に、なってるんだよ」

「……………」

密輸ルートだ。ようやく理解できた。＞帝国＜南方で採れる麻薬を精製し、＞同盟＜領内に運び込む。ジャイロ機を使って、西部边境領北部山岳地帯越しに密輸する。それに軍が関与しているという噂は以前からあった。さもなければ、警戒厳重な国境地帯の空をやすやすと飛行できるはずがない。

軍特務機関による＞同盟＜ディスタビリイズ・オペレーション圏への不安定化工作に名を借りた、汚い裏金稼ぎ。軍の特務機関は、議会にもマスコミにも、なろうことなら自分たちの上司にさえ知られることなく好きに使える金に飢えている。戦後、＞帝国＜ディスタビリイズ・オペレーション圏内でも＞同盟＜産の合成麻薬が蔓延し始めている。＞同盟＜側の不安定化工作というだけでない。おそらくは国境の向こう側でも、同じような闇の力学が作用し、両者の融合による合成獣キメラのような麻薬ビジネスが育ちつつある。

この飛行ルートは、この国境地帯に絡みつく腐った闇のビジネスの副産物といったところだろう。

「このルートは明日には閉ざされる。だから今日の内に飛んでもらわなきゃならない」

「……ふざけるな！」

グエンは吐き捨てた。

「ふざけちゃいけないさ。それなりの金もあちこちに撒いて、ようやく手に入れたルートだ。ま、こっちは自分の命も掛ってるんでね。なりふり構ってられないのさ」



「貴様らのような下衆げすどものおかげで、地元の人間がどれだけ迷惑してるか　！」

「ご高説はいずれ伺おう。その内、暇が出来たらな。で、飛んでくれるのか、くれないのか　」

「断る」グエンはファンに皆まで言わせず、拒絶した。

真っ向から怯むことなく睨むグエンの表情をしばし眺めたファンは、「そうか」と素っ気なく頷くと、テーブルの上の拳銃を手にふらりと立ち上がった。その一瞬、垣間見えたファンの両目の酷薄さに、グエンの背筋に怖気が走る。

「おい、待て！　貴様、何を　！」

慌てて立ち上がるうとするグエンを、いつの間にか背後に廻ったヴーがシートにお圧さえ込む。

「止める！」

叫ぶグエンをよそに、乾いた銃声が、小さな事務所に鳴った。

苦痛に押し潰された若者の絶叫。血と無煙火薬コルダイトが入り混じった、特有の匂いが鼻につく。

ヴーが手を放すと同時に、グエンはシートから飛び出した。事務所の床の上に、椅子に縛られたままデインが転がっている。

真っ赤な血だまりが、床に広がっている。動脈を断たれたのか、出血が激しい。右の太ももから血を吹き出させて、デインが床の上で苦痛にのた打ち廻っている。

「何してくれてんだ、手前っ！」

グエンはその場に立つファンの胸ぐらを掴む。

「落ち着けよ、社長」

「こんなことされて、落ち着いてられるか！」

激昂するグエンの顎に、ファンはまだ熱を帯びた銃口を押し付ける。

「……………な……………っ！」

「落ち着こうぜ、社長。あんたがルールを勘違いしているようだ」  
「だから、これで仕切り直した」

「勘違い……ルール、だと？」

「そうさ。ビジネスのルール。俺とあんたの間のビジネス」

「……………」

ぴたりと顎に張り付けられた銃口に<sup>お</sup>圧されるように、ゲンはゆつくりとファンの身体から手を離す。

「いいか、社長。俺は今回、ここにジャイロ機パイロットの操縦士と整備士メカニックを連れてきてる。俺はこういうことで手抜きはしない。それで戦争も、戦後の稼業も生き抜いてきた。だから、あんたんとこの小僧をこの場で殺し、あんたも殺して、機体を奪ってもさほど問題はない」  
「……だったら、何でこんなことを……？」

喘ぐように問うゲエンに、ファンは悪戯っぽく口許を歪める。無論、両目はつめたく冷え込んだまま。

「そこさ、社長。俺とあんたのビジネスが成立する余地は、そこから先にある」

何が言いたいのか。理解できずに眉を顰めるゲエンに、ファンは続ける。

「俺が連れてきた操縦士は中原出身で、この辺の空に慣れちゃいない。機体の癖も判ってない。荒れやすい山岳地帯の空でそいつは無視するには大きなリスクだが、最悪諦めきれないリスクでもない」

「つまり」

「そうだ。その範囲内でのみ、俺とあんたのビジネスは成立し得る。そういうことだ」

「……機体だけ、勝手にもってゆけばいいだろう」

「いい提案だ。だが駄目だ。俺たちの存在を通報されて、途中で空軍に撃墜されるのは、まったくもって楽しくない」

「通報なんかしない」

「そういう些末なリスクは、事前にきちんと潰しておく主義でね」

「無線を壊せばいい」

「勿論、そうさせてもらう。だが、誰かがここに通りかかったら？ そいつが無線機を持っていて、当局に通報したら。そして、そこに俺たちがどこへ向かったのかを喋る口があったら？ これも楽しいない想像だが、あり得ない話じゃない。こいつも潰すべきリスクだな。そうじゃないか、社長？」

まるで契約書の穴を肅々と潰す法務担当のように、ファンはグエンの退路をひとつつつ潰してゆく。

「さて、社長。経営者としての、あんたの判断を訊きたい」

「……デインに……彼に、治療を」

グエンは掠れる声で告げた。ファンは冷ややかに突き放す。

「まずは本契約がまとまってからだな、その話は」

「くそっ！ 判った。引き受ければいいんだろっ、あんたらの操縦<sup>パイロ</sup>士を！」

その声にファンは笑顔を浮かべると、拳銃を左手に持ち代えて、右手を差し出した。

「契約成立だ、社長。いいビジネスにしよう」

グエンはその手を無視して吐き捨てた。

「殺してやる」

「その内にな」

ファンは何故か嬉しそうに嘔<sup>うそぶ</sup>いた。

## 2 (後書き)

第2章抜かしてアップしてた……orz  
すいません。急ぎよ差し替えました。  
引き続き第3章をよろしく。

「おい、何をやってるんだ、お前ら!？」

デインが治療を受け、鎮静剤で眠りにつくのを見届ける。それからファンとともに再び格納庫へと戻ってきたグエンは、断りもなく機体に取り付いている男たちの姿を目にして、かっとなって怒鳴りつけた。

側面のスライド式のドアを外し、客室<sup>キャビン</sup>の床に機銃架を取り付けようとしている。いずれもこの辺りの土地の地肌に準じた、薄いオリブブラウンの迷彩服に身を包んでる。そんな男達が機体に群がって作業をしている様子を見ると、まるで戦争をしていた頃に引き戻されたようで、湧き起こる苛立ちおさえられなくなる。

「構わん。そのまま作業を続ける」

さほど気にする様子もなく、ファンが続行を命じる。

「おい!」

「そんなに騒ぐことじゃないだろう。動力機銃を載せてるだけだ」

「そんなことを許した覚えはない!」

「あんたの許しは必要ない。専門家としての意見は拝聴するが、作戦上、必要と判断することがあれば、こっちの判断で実行する。それだけだ」

「作戦だと……」

「いい機会だから、ここで作戦の流れについてざっと説明しておく。現地へ飛んで、俺たちを下ろす。あんたには、そのまま上空から地上にプレッシャーを掛けてもらう。あの機銃はそのためのものだ」

「何時間、現地上空に待機させるつもりだ? ドアを外したおかげで空力が悪化して、機体が不安定になる。燃料消費だって増える。それに俺の機体で運べるような少人数で山狩りしても、効果なんか

」

「別に山狩りなんかするつもりはないさ」ファンは素っ気なく答え

た。

「見つけるのはあっちの方だ。ジャイロ機使って鳴り物入りで現地入りしてやれば、向こうから見つけてくれる。それを迎え撃つ。勝つても負けてもそれで決まる。ざっと見て、いいとこ一時間つてところかな」

「……………」

よく判らない。手を抜いている様子はないのに、ファンの口調からは復讐譚にありがちな熱量を感じない。事務仕事を淡々とこなすように、必要なことをこなしているだけ。そんな口振りだった。  
「あの男……ザンと言ったか。あんたから逃げてるわけじゃないのか？ 何だか、現地で待ち合わせてるみたいに聞こえるが。あの場所に何か意味があるのか？」

「……………」

ここまで饒舌だったファンが不意に押し黙る。言い淀んでいるというより、ここにきて急に胸中に湧き起こる感情を扱い兼ねているかのような、そんな困惑した表情のようにも感じられた。

「おい、あんた！」

「カバラス峠」

「は？」

「俺たちは、あの場所で生れたんだ。だから、あそこに戻るのは当たり前前なのさ」

そこには、余人の斟酌しんさくを頭から拒絶するような響きがあった。

だが、何を言ってるのか。

ファンの口にした「カバラス峠」は、こうして西部辺境領が戦争で荒廃する前から、人を寄せ付けない峻厳な北部山脈地帯のど真ん中だ。中原ハートランドから来た開拓民はおろか、地元の少数民族だってそこに集落を構えていたなどという話は聞かない。特に何かが採れるわけでもない、地元民だって滅多に寄り付かない。そんな場所だ。

そこで「生まれた」などと、一体、どんな寝言

呆れて匙さじを投げかけたグエンは、はたとその場所の持つ意味に気

付いた。

古戦場。若く天才的な将校に率いられた、寄せ集めの敗残兵を掻き集めた一箇小隊。それが無謀にも、同盟くの機甲軍に挑みかかり、大打撃を与えた伝説の戦い。その戦場だった。

グエン自身は直接関与していないので、実際にどういう状況だったのかは知らない。だが、戦闘の直後から軍の広報部門が「英雄的な戦いだった」と大々的に触れ廻っていたので、話としては知っている。もっとも、実際にその戦いに参加した兵士と顔を合わせるのには、これが初めてだった。

こいつは、そしてあのザンという青年も、「カバラス峠の戦い」と称されるあの戦いの生き残りなのか……。

だが、その生き残りのふたりが、こうして思い出の場所を舞台にして殺しあおうとしている。

訳が分からなかった。

「ファン！」先ほど事務所にいたヴーが、書類を挟んだクリップボードを片手にこちらにやってくる。

「機内に乗り込む人員と持ち込む戦闘資材の一覧だ」

「ふん」

受け取ったファンはつまらなさ氣に一瞥すると、そのままグエンに引き渡す。

ジャイロ機の積載可能重量を意識しながら、反射的にリストのチェックに取り掛かったグエンは、すぐに啞然とした。

「何だ、これは!？」

「何を驚いてる？」

「あんたの部下が一六人つてのはいい。軍用ヴィーグル一台も判った。

だが、この山ほど積まれることになってる型番は地雷だな？ 他にも迫撃砲に対装甲用の速射砲まで。こんなもの、一体どこで

？」

「戦争中に武器庫から抜いたはいいが、強力過ぎて娑婆<sup>しやば</sup>じゃ買い手がつかなかった代物だ。在庫品のバーゲン一掃セールってとこさ」

「……お前ら、本気で戦争でも始める気か？」

「勿論」フアンは屈託なく笑って言った。

「上から眺めてても、結構な見世物になるぜ。楽しみにしてくれ」  
「……………」

たったひとりの人間を相手にするには、あまりにも過剰な火力だった。何のつもりだ、こいつら。訳が分からない。訳が分からない。

戦争は終わった。終わったんだ。

鉄と血と死に支配された戦場へ、機内にたつぷり詰め込んだ兵士と兵器を送り届け、一目散に逃げかえる毎日。火だるまになって撃墜された僚機のこと、戦場に放り出した兵士たちの迎える運命も、決して振り返ることなく基地へと逃げ帰る。

逃げて逃げて、何もかもすべてを振り切って辿り着いたはずのこの場所で、こいつらは今も戦争を続けている。平和を取り戻したはずのこの辺境の空に、こいつらは戦争を持ち込もうとしている。

いかれてる。狂ってる。理解できない。訳が分からない。

「どうした？ 顔色が悪いぞ」

「……いや、大丈夫だ」

グエンは吐き気を抑えきれなくなりつつあった。

「なら、いい。離陸チェックを始めてくれ。日没までにすべてを終わらせたい」

それだけ告げると、フアンは背を向けて機内への搬入作業を行っている部下たちの下へと向かう。

その背中を睨みながら、グエンはもう一度、「殺してやる」と呟いた。



人手や小型フォークリフトで搬入可能な資材を機内に積み込むと、クローラーで格納庫から機体を引き出し、離着陸パッドへ。一番の大物の軍用ヴィーグルは、そこで後部ハッチから機内に載せた。

「全員搭乗した」

「そうか」

身に染みついた離陸前チェックのプロセスを続けながら、グエンはファンの言葉に素っ気なく応えた。

と、そのファンが断りもなく自分の横の副操縦席に座ろうとするのを見て、グエンは思わず声を上げた。どこで見つけてきたのか、デインが使っていたヘルメットまで被っている。

「おい、あんたがそこに座ってどうする？ パイロットを連れてきてるんだろ。そいつをそこに座らせるよ」

この辺の空に慣れてなくとも、パイロットならいざという時、機体を任せることもできる。少なくとも航法の支援くらいはできるだろう。わざわざ副操縦席に座らせる意味はある。

「ああ、そのことが。あれはウソだ」

「はあ？」

さらりと言つてのけたファンの言葉を、グエンは一瞬理解できなかった。

「おまえさんがその方が納得しやすいだろうと思ってな」

「ふざけるな！」反射的にファンの胸ぐらを掴んで怒鳴っていた。

「案外、手が早いな、あんた」

「黙れ！ この話はここで終わりだ。俺はここで降りる！」

「それはないな」グエンに掴まれたまま、ファンは何の動揺も見せずに言った。

「あんたにここで降りられると俺たちは困るが、あんたはもっと困ることになる」

「何だと？」

「あの坊やを殺す」

ストレートに告げられたファンの言葉が、一瞬、グエンの胸に冷

たいナイフのように刺し込まれる。

「……そ、それがどうした」

この手の輩との交渉には弱みを見せては駄目だ。たとえそれが致命的な弱みであっても、どうということはないように見せかけねばならない。

「強がつてもダメだ。操縦桿を握ってる時はどうかしらんが、こうして地上にいる間は、あんたにあの坊やは見捨てることはできない。あんたがここで降りるのは自分の意地でしかない。それが所詮、意地にすぎないと自分で判っている以上、そのために他人の命を平気で捨てられるような人間じゃない。それがあんたの限界さ」

「……何で、そんなことが」

「さっきあの坊やを撃った時のあんたの取り乱しようを見れば判る。あれであんたの底は割れた。交渉事でタフさを気取るなら、あの時点から始めとくべきだったな」

「……………」

図星だ。唯一の社員であり、ほとんど家族のように接してきているデインを見捨てることはできない。激昂する感情に任せて、何もかも見捨てて、放り出す。気持ちよくテーブルをひっくり返して、後は知ったことかと開き直ることはできない。

社会人として当然のこと……？

いや、自分がかつてそれをやってのけたことがある。周囲の迷惑も考えず、何もかも振り切って、こうして辺境<sup>エッジ</sup>まで逃げてきたではないか。

それなのに、いつの間にかそれができなくなっている自分にこそ愕然とする。

「……あんたには、出来るっていうのか？」

「さて、どうだろうな」

苦しまぎれのグエンの問いに、ファンは軽く肩をすくめて見せた。「さあ、手を離して、離陸準備に戻ってくれ。これ以上もたもたしていると、日が暮れちまう」

「殺してやる」

「三度目だな、あんたにそう言われるのも」

二回目も聞こえてたのか、とグエンは眉を顰めた。こんな男でも油断や隙などを見せることなんてあるのだろうか、と今度こそ聞かれないように胸で呟いた。

### 3（後書き）

前章の事務所に続いて、格納庫 ジャイロ機機内に場所を移してグエンとファンの駆け引きが続きます。

で、本編中に出てくる「カバラス峠」なる地名についてが『棺のクロエ2 超高度漂流』<http://bit.ly/9C2tL3>内でちらと出てきた地名です。

この場所と縁のある「あの人」が本作でも出てくるかどうかは……その辺は楽しみに。

次回はいよいよ離陸。カバラス峠の奥深くで、遂にザンとも接触するのですが……。

更新は来週10月2日（日）の予定です。  
ではまた

ティエンソン航空のある空港からカバラス峠までは、まっすぐに飛べば一時間ほどで着く距離だ。だがそれは、ジャイロ機では越えられない数千級の山々や空軍の電波警戒機サイトの存在を無視すれば、の話である。

ファンの持ち込んだ航空地図の通りに飛べば、倍の二時間以上は確実に掛かりそうだった。空軍とはどういう話になっているのか知らないが、いずれも警戒電波圏すれすれの場所を飛ぶようになっていた。電波警戒機サイトはそれぞれ近隣のサイトと担当範囲がある程度被るように配置されており、後方の防空指揮所でそれをクロスチェックして脅威判定を下す体制が構築されている。それでも地形や電波警戒機の性能的に感知しがたいスポットがぼつぽつと存在し、そこを縫って飛べというものだった。

どうも空軍とは「堂々と電波警戒機に映っても無視してくれる」という話ではなく、「ここらなら大丈夫そうだから、そこを飛べ」という話になっているらしい。それ以前に、そもそもどこまで話が通ってるのかも怪しいものだったが。

つまり、何らかの理由でコースを外れたら、即座に撃墜されても文句も言えない、ということだ。

しかもそうしたスポットはことごとく、飛行に適しない難所ばかりときている。山肌ぎりぎりまで迫まらねばならない峻険な渓谷や気流の荒い谷間を抜ける。考えてみれば当たり前だ。普通なら誰も選ばないような危険なルートだからこそ、電波警戒機サイトの整備も遅れているのだ。

そんな危険なルートを積載重量ぎりぎりのジャイロ機で飛ぶ。しかも、副操縦士に航法を任せることもできない。事実上、ひとりきりの飛行だ。

飛行中、一切の気の緩みは許されなかった。ファンがわざわざグ

エンに操縦桿を握らせたかったのはこれが理由だったのだろう。この条件で無事に目的地まで辿り着けるのは、この西部辺境領北部でもほんの数人　民間ではグエンひとりに違いない。

そのファンとは言えば、ヘルメットの遮光バイザーを跳ね上げて副操縦席から大きな双眼鏡を振り廻して機外を観察中だった。何が楽しいのか、万年雪に覆われた山肌を熱心に見ている。離陸以来、ほとんど口を利かないのは助かるが、いい気なものだ。もしかすると、復員兵がかつての自分の参加した戦場へ観光にでも来ているような気分なのかもしれない。

神経を磨り減らす操縦の横で物見遊山気分でいられるのには苛立ちを覚えたが、グエンには文句を口にする余裕すらない。乗ってる連中がどう感じているか知らないが、かなりきわどい綱渡りな飛行で難所を次々に越えてゆく。

もつとも、このくらの難度の飛行は、戦時中は日常茶飯事だった。特に戦争末期には、>同盟<側の電波警戒機サイトも増えだし、移動式の電波警戒機車両が急に展開し、予想外の場所で迎撃を受けることも少なくなかった。

敵の迎撃機もなければ、阻塞ワイヤーも張られてない。地上からの対空砲火もない。天候も比較的、落ち着いている。当時の自分が見たら、「まるで遊覧飛行だ」と鼻で嗤ったろう。

そんな飛行であっても、今の自分はびっしりと下着を濡らすほどに緊張している。帰りも同じコースを辿るのかと思うと、気が重くなる。

歳を取ったということか。あるいは、娑婆しゃはに慣れ過ぎたのか。

それでも目的地まであと少し、といった地点まで差し掛かった時、『そろそろだな』と、ヘッドセット越しに、ファンがいきなり口を開いた。

「判るのか？」

『下を見ていれば判る。戦争中はずっとこの辺で闘ってきた。ま、半分は逃げ廻ってたようなものだったがね。だから、この辺は俺た

ちにとって庭みたいなものだ』

「……………」

そんなものか？ ごつごつとした大小の岩塊を荒っぽく削り出したような地上の風景に目をやる。ろくに草木も生えていない。手入れのされない荒れた舗装道路らしきものも目に入った。＞同盟＜軍が戦時中に敷設したものだろうか。他に文明の痕跡らしきものはない。『世界の涯』<sup>はて</sup>という言葉が不意に浮かぶ。何もこんな場所に来て戦争しようという奴の気がしれない、とグエンは思った。

『客室<sup>キャビン</sup>に繋いでくれ。部下と話がしたい』

「判った」機内通話の回線を繋ぐ。

『間もなく目的地だ。ヴー、兵の状況は？』

そういえば、客室<sup>キャビン</sup>横のドアは両側とも外されている。たぶん着地と同時に、兵員を一秒でも早く機外に飛び降りて展開させるためだろう。空間機動歩兵の得意技だが、高い標高を飛ぶポイントもあったのだ。客室<sup>キャビン</sup>のシートにはエンジン排熱を利用した暖房が申し訳程度についているが、流れ込む冷たい空気で凍傷を起こす者がいてもおかしくはなかった。

だが、ヴーは平然と返してきた。

『全員問題ない。装備も兵も確認した。すぐに戦闘行動に移れる』

その無造作な響きに、グエンは戦慄した。そうだ、空間機動歩兵<sup>こうくうきどうぶひょう</sup>はどんな酷い扱いを受けても、飛行中だけは文句のひとつも口にしなかった。死んだように押し黙り、機長にすべてをゆだねて黙って座っていた。きっと対空砲の直撃を喰らって火だるまになる機内でも、黙って何も言わずに焼け死んでいったのではないか。そうパイロット仲間の間で囁かれていた。グエンも戦時中、いろんな部隊の兵員を運んできたが、こんな奴らは他にはいなかった。

戦後、軍を辞めたそれぞれがどういう人生を歩んでいたのかは知らないが、少なくとも今客室<sup>キャビン</sup>にいる連中の時間は、確実に戦争中のあの過酷な日々を引き戻されているようだった。

『警戒配置』

ファンが短く告げると、返事も抜きに客室<sup>キャビン</sup>でどこかと兵士たちが動きだす気配がした。

「おい、ちよつと待て！ 何を始める気だ！？」

「奴は先にここに来ている。ここはもう戦場だ。あんたも、ここから先は俺の指示に従ってもらう」

「お前、何を言ってる？」

「動力機銃に火を入れる！ 各自、全周警戒。何か異常を発見したら、すぐに報告しろ！」

ファンの指示に従って、兵士たちは自動小銃を構えたまま左右のドア脇に張り付く。同時に手近の取っ手類に金具<sup>カラビナ</sup>を引っかける。急な機体の動きにも振り飛ばされないようにするためのものだ。

「……………」

客室<sup>キャビン</sup>の空間機動歩兵達がぎびきびと戦闘配置を整えてゆく。操縦<sup>コックピット</sup>席にある機内確認用のミラー越しに見る限り、彼らの動きに戦後のブランクはまったく感じられない。本当に戦時中に戻ってしまったかのような錯覚を覚え、グエンは軽い眩暈を感じた。

「機長！」 ファンが叫ぶ。

「高度を落としてくれ」

「構わんが、どうするつもりだ？ よもやこの調子でカバラス峠全体を調査して廻るわけにもいくまい。峠全体で、一体、どれだけの広さが」

「いや、このまま飛んでくれればいい。このコースは俺たちが峠に入っていたコースだ。このコース上のどこかに、奴は潜んでいる！」

凄い自信だが、どこからその自信が来るのか。まあ、見つからなかったら、見つからないで、この連中の戦闘に捲き込まれずに済むということなのだから、グエンとしては万々歳ではあるのだが。



指示に従って高度を落とす。地面がぐつと近づいてくる。

しばらくゆくと、似通った殺伐とした風景の中にも、少しずつ変化があるのが見て取れてきた。ところどころで、背の低い灌木がまばらに生えている場所がある。多少なりと地下水が通っているのかあるいは春の雪解け時の水分だけで、一年を生き抜くような植生なのか。茶色がかって水気のなさそうな木々の葉を見る限り、後者のような気がしてきた。

横の副操縦席では、双眼鏡を掴んだままのファンが依然、機外に目を向けている。後部の客室<sup>キャビン</sup>でも、自動小銃や動力機銃の銃口を向けながら、兵たちが周辺を目視で検索していた。

「……………」

自分はどこまでこのおかしい兵隊ごっこに付き合えばいいのか、と醒めた感慨を覚えながら、ファン達に吊られるように機外へ目をやる。その視界の片隅に、奇妙な違和感があった。そのまま視界の外に流れ去りかねない「それ」に、強引に意識を引き戻す。

「何だ、あれは……？」

「どうした？」

ファンの問いを無視して、ゲエンは自分用の小型の双眼鏡を取り出した。オペラグラスに毛が生えたような代物だが、大きさが手ごろで作りが頑丈なので戦時中から使っている。双眼鏡のレンズを覗き込むと、肉眼では芥子粒ほどの大きさだった何かが、人の形を持つて浮かび上がる。

部分的になだらかになっている斜面の一角に、誰かが胡坐をかいて座っている。いや、異様なのは、その周囲に何か棒のようなものが何本も突き刺さっていることだ。何かの宗教的儀式か？

ファン達はうまく見つけられないらしい。苛立ったような唸り声が、ヘッドセット越しに聴こえてくる。現役パイロットと兵隊崩れのヤクザ者では、視力に差があって当然だが、多少溜飲が下がないでもない。

もう一度、双眼鏡越しに目を凝らす。肩まで伸びた白髪。その下

から垣間見える浅黒い肌。こんな山奥では自殺行為同然のラフなボ  
マージヤケット

間違いない。あの青年      ファン達が追っているザン・セオ・キ  
エムだ！

『よし、こちらも見つけたぞ！』

だが、何をやっているのだ？    胡坐をかいて、ナイフで灌木の幹  
を削っている。周囲に突き刺さる棒のような物も、ザンが作ったの  
か。だが、何のために……？

『距離は約二、〇〇〇ってところだな      ここで機位を固定！』  
「は？」

『聞こえなかったのか？    ここで固定だ』

慌てて操縦桿サイクリック・スティックを操作して、前進時には斜め後方に流れている頭上  
の主ローターの気流を真下に調整。後は出力桿レクティブ・レバーで、重力に対して機  
体が中立になるようローター出力を調整する      実際には、ゆるや  
かな横風があるので、主ローターの角度を小刻みに調整する必要が  
あったが。

いずれにせよ、グエンは職人芸並みの技量で巨大な大型ジャイロ  
機をホバリングさせ、その場にぴたりと静止してみせた。

「本当にここでいいのか？    まだ距離があるぞ」

『駄目だ。俺が命じるまでこの距離を維持だ。それと現位置を維持  
したまま、機体右側面を奴に向ける』

「了解」

機体後部のテールローターの出力を調整し、ファンの指示通りに  
機体の向きを変える。

その間もファンは双眼鏡でザンの姿を捕捉し続けている。

その彼方では、ザンがゆっくりと立ち上がる。その手には、いま  
で自分で削っていた棒を持っている。

『気づいたか      いや、もっと早くから気づいていたはずだぞ。舐  
めやがって』

誰に聞かせるともなく、ファンが呟く。

『ヴー、動力機銃で射撃を開始しろ』

『待て。この距離から撃ちかけてもろくに当たらんぞ！』

『弾が届けばいい！ 構わん。始める！』

半ば呆れるような一瞬の間、客室キャビンからどすの効いた動力機銃の発射音が聴こえてきた。

「おい、何やって　！」

『うるさい！ 黙ってる！』

ザンの姿から視線を逸らさず、ファンがグエンを怒鳴りつける。

動力機銃で使用する大口径の機銃弾は、そこに込められたエネルギーと重量だけを考えれば、かなり遠方まで到達することができそうに見える。だが実際には、重量の大きな銃弾は、重力や横風によって弾道がぶれ易い。これだけの距離があると、狙った場所に着弾させるのはなかなか難しい。ましてや狙撃銃でもない動力機銃で弾をばら撒いているだけでは、そうそう当たるものではない。

事実、ザンの周辺に大きく外れて着弾し、本人に当たる様子はない。ザンも特に怯む様子もなく、悠然とその場に立ってこちらを見ている。

だが、さすがに射手がベテランなだけに、徐々に銃弾が収束してゆく。すぐ足元にも着弾するようになり、身体を掠める銃弾が髪や衣類を小さく引き裂く。

それでもザンは立ち尽くしたままだ。

やがてその肩に着弾　ぐらりとザンの長身が揺れて、倒れかける。

『やったか！』

いや、待て。大口径の機銃弾を人体が喰らえば、上半身を半分くらい持つてかれる。勿論、即死だ。多少、当たり所が良くても、ショック症状で死に至る。

それが何で、ああして立っていられるのか？

ザンが何事もなかったかのように身を起こす。遠目で見る限り、どこか身体の一部を削られた様子はない。さすがに着ているボマー

ジャケットは着弾した肩からざつくりと引き裂かれてはいたが、その下から見える肌は無傷なように見える。

「……………」

グエンだけではなく、ファンも客室<sup>キャビン</sup>の兵士達も呆然として言葉を失っていた。いつの間にか、動力機銃の作動音も已<sup>や</sup>んでいる。

有りえない。大口径の機銃弾の直撃を受けて、平気で立っている人間など、この世に存在するはずがない。

だが、ならば……人間では、ない？

『まずい！』

ファンの不意に上げた声で、グエンは我に還った。

それまでその場に立ったままだったザンの身体が大きくしなり、手にした木の棒 いや、槍が放たれる。

回避する余裕などなかった。動力機銃ごと射手の身体をぶち抜いて、開放されたままの機体左側面から外へと飛び出してゆく。悲鳴すら聞こえない。一陣の疾風<sup>かぜ</sup>が機内に飛び込んで、動力機銃の銃座ごと射手をさらって去って行ったかのようなだった。

待て。ちよつと待て。

「投げ槍」の届く距離じゃない。ましてや正確に射手を射抜くなど……………」

いや、その前に。

何だあれは？ 何なんだ？ ありえない。こんなバカな話

『回避行動！ この場から離れる！』

人知の理解を越える事態に思考がホワイトアウトしかけていたグエンに、ファンが怒鳴る。

考えるより先に手足が動いて、上昇と機位の反転を開始する。

『次が来る！ 少しでもここから離れ』

ファンが言いかけたそこで、がん、という衝撃とともに機体が震え、不意に高度が下がる。

『どこをやられた？』

「エンジンを片肺喰われた！」

続けてもう一度、衝撃　今度は後部テールローターへの動力伝達系が反応を失う。プロの狙撃兵並みの精度で、次々にこちらの致命的な箇所を狙い撃ちしてくる。

元々、軍用ジャイロ機として開発された機体だ。少々の銃撃には耐えられる防弾性能は持っている。だが、あんな太さの手槍を次々撃ち込まれる事態は、いくらなんでも設計者の想定範囲外だろう。

動力の復旧を諦めて、機体が落下する際にローターが回転することによって生じる浮力を利用するオートローテーション飛行に切り替える。だが、動力を失ったテールローターが徐々に力を失うにつれ、機体のぶれが激しくなる。テールローターが完全に止まってしまえば、機体は頭上の主ローターと逆方向にくるくると回転を始めてしまう。

「ダメだ。これは落ちるぞ……！」

『少しでも奴との距離を取ってくれ！』

このまま墜落するという発想がないのか、ファンが命じる。

「……ご期待に添えますか、ね！」

必死に機位を保ちつつ、周囲の地形に視線を走らせる。流されるように尾根をふたつみつっ越えてゆく。どこかに着陸可能な地形はないか。なければいずれ、このままどこかの岩肌に激突して、そこで終了だ。

と、視界の片隅に、奇跡的に平らな地面が目に入る。ごろごろとした大小の岩が転がっているが、背に腹は代えられない。

「そこに降りるぞ！」

サイクリック・スティック

ファンの返事を待たずに、操縦桿を押し込む。高度が一気に失われ、疑似的な無重力感に捉われる。

無限に近い時間の果てに、どすん、と足元から衝撃が伝わってきた。機体下部の着地用スキッドが地面に接触した衝撃だった。

荒く安堵の息を洩らすと同時に、今度はずりりと機体が横滑りを始めた。

『何だ、今度は！？』

「……平地じゃなかった、ってことだろうな」

上空から平地に見えた着陸地点は、実際にはゆるやかな斜面だった。考えてみれば、こんな土地におあつらえ向きにジャイロ機の着地に適した平地などあるはずもない。激しく揺れる機内からの眺めだったので、見誤ったのだ。

『どうにかしろ！』

「無理だ」

地上に降りたジャイロ機に、自力でできることあまりない。ましてや動力を失った機体ならなおのことだ。

気休めで操縦桿を左右に振ってみるが、ゆっくりと横滑りの速度が増してゆくのを止められない。

『総員、急いで機体から脱出しろ！』

「逃げるのかよ！」

「その前に、いいことを教えておいてやる」ファンは手早く安全帯ハーネスを外し、ヘルメットを脱ぎ捨てて言った。

「この先は崖だ」

それだけ言い置くと、グエンの肩を軽く叩いて、副操縦席からするりと抜けだした。

「おい、こら、この野郎　っ！」

怒鳴りかけたものの、グエンの去った副操縦席の向こうからは、斜面の終わり　切り立った向かいの崖の壁面が迫っていた。

今度こそダメか　と覚悟しかけたそこへ、機体の横腹から殴りつけるような衝撃が伝わってきた。身体は安全帯ハーネスで操縦席に固定されているが、その分、ヘルメットをかぶった頭部が激しく振り廻される。自分ではどうにもならない。舌を噛まないように、歯を喰いしばって耐えるのがやっとだった。

やがて機体に加えられる衝撃がやんだ後、グエンは白濁する意識の海に引きずり込まれようとする自分に気づいていた。脳震盪か。畜生。

「あの野郎、今度こそ、ぶっ殺してやる……」

それだけ絞り出すと、グエンはそのまま意識を失った。

#### 4（後書き）

そんなわけで、あっさりジャイロ機隊とされちゃいました（爆。  
まあ、元々、陸戦をやるのが趣旨だったんで、早めに撃墜される予定ではあったわけですが。

次回はカバラス峠で戦闘準備の回。

更新は来週10月9日（日）の予定です。  
ではまた。



「おい、社長。起きてくれ」

荒っぽく頬を張られる。呻き声とともに、グエンは無理やり意識を現実に戻された。

「いい加減にしろ、この野郎！」

「やっと起きたか」

グエンに胸ぐらを掴まれながら、ファンは平然と言った。

「さつきはすまなかったな。これから忙しくなるんで、あんたもこのまま寝かせとくわけにはいかなくてね」

「……そうだ。機体はどうなってるんだ？」

ファンの台詞を頭から無視し、グエンは周囲を見廻した。

「あんたの機体なら、そこに」

突き飛ばすようにファンの胸元から手を離すと、崖の手前で無残な姿をさらすジャイロ機へ駆け寄る。

機体側面、エンジン部分と機体後部に無造作に木槍が突き刺さっている。それだけではない。着陸の衝撃が、先ほどの衝撃のためか、機体フレームがあちこちが歪んでいるのが見て取れる。その周囲に迷彩服の兵士たちが群がって、機内に残る資材を運び出している。

「何てことだ……」

年甲斐なく思わず涙腺が緩みそうになるのに堪え、近寄って改めて機体状況の詳細を確認する。

どうも、崖の手前に大きな岩塊があったらしく、そいつに激突して崖からの転落が避けられた、ということらしい。代わりに機体左側面がその岩に喰い込まれ、大きく破損していた。これだけ破損していると、たとえ持ち帰っても機体の修復は不可能だろう。

せいぜい、無傷の左エンジンなどのパーツを回収できるくらいかと考えかけ、それ自体、不毛な仮定であることに気付く。そもそも、こんな地の涯から、どうやって帰ればいいのか……。

膝をついて呆然と壊れた愛機を眺めるグエンに、ファンが無遠慮に声を掛けた。

「社長、気が済んだら、こつちを手伝ってくれ」

さすがにこの物言いは癪に障った。グエンはファンを睨み付け、吐き捨てるように言った。

「知るか。お前ら、勝手に戦争でも何でもやってる。俺はもう、あんたらに関わり合う気はない」

「気を悪くしたんなら、謝る。それでも俺たちはあんたに感謝している。ここまで来れたのは、あんたのおかげだ。着陸時に機体が失われていたら、装備品の大半を失っていたところだ。それでは、奴を殺すことができない」

「……殺す……？」

グエンが疑念を口にする。ファンは頷いて言った。

「そうだ。奴はここへ来る。それを俺たちで迎撃して、殺す。少し段取りが変わったが、当初の計画通りだ」

「……………」

機銃弾の直撃を受けて、平然と向き直ったザンの姿を思い出した。そして手製の木槍で遠方を飛ぶジャイロ機を撃ち落す戦闘力。肚はらの底から恐怖がまた湧き起こってくる。

そいつを「殺す」？ 正気か、こいつら？

「……あれは、何だ？」

グエンは乾いて張り付く声帯から、無理やり問いを絞り出す。

「俺もよくは知らん」ファンは首を横に振って応えた。

「だが、戦時中、機神マシーナリイ・コトシロという無敵の兵士がいると聞いたことがある」

「それなら、俺も知っている。」

機人マシーナリイの中の機人。完全に機械化された一箇師団を単独で撃破し、あらゆる火器や機械車両と接続して支配下に置き、無線の傍受や妨害も思うがまま。まさしく機人マシーナリイの神。故に称して機神マシーナリイ・コトシロ。

……だがそれは、不利な戦況の中で兵士たちが作り出した妄想の産物だ。そんなものが実在していたら、帝国くはもつと楽に戦争に

勝ってる」

「そうだな」ファンはいったん頷いてから続けた。

「では、あれは何だ？」

「……………」

「俺が聞いた機神の話には、あらゆる銃撃を跳ね返す、とあった。

事実、ドウツクルンで、拳銃やらショットガンやら自動小銃やらで、至近距離から滅多やたらに撃ちこんでやったが、平気な顔でその場を立ち去りやがった。機銃弾ならあるいは、と思ったが、あの様だ」

「……本当に、奴は機神なのか？」

「さあな。ドウツクルンで奴を襲ったときは、手下に持たせた無線に妨害や傍受を受けていたような様子はなかった。だから世間で噂されてるような機神とはちよつと様子が違ふところもある。だが、少なくとも、まっとうな人間じゃないのは見ての通りだ」

だから、この重武装だったのか。確かに、あれが伝説の機神なら、これだけの重装備も頷ける。いや、こんなもので足りるわけがない。

だが

「あの男、あんたの幼馴染だといったな？ 戦争中も一緒にいたんだろう？ 何で、そいつが機神になんかになつて戻ってきたんだ？」  
「さあな。俺が知るわけないだろう」ファンは顔を苦く歪めて言った。

「確かにあの時 武器庫を吹っ飛ばした時、あいつの屍体は確認していない。直後に憲兵に現場を封鎖されて、手が出せなかったからな。だから、何かの手違いであいつが生きて帰ってくる可能性はゼロじゃなかった。あくまでゼロじゃないってただけだな。

だが、だからってあんな化け物になつて帰ってくるなんて、誰が想像するかよ！」

ファンはこれまでグエンの前で示していた余裕のある態度をかなり捨て、感情を顕わにし始めていた。

「正直、あいつが本当に俺たちの知っているザンなのかも判らない。

だが、あいつがザンの皮を被った化け物なら俺たちで殺さなきゃならない。あいつが本当に俺たちの知るザンなら、もう一度、俺たちがこの手で殺さなきゃならない。それは、俺たちの仕事だ。他の誰にもやらせるわけにはいかない。だから、俺たちはここに来たんだ」

「……………」

よく判らない。だが、出発前にファンがグエンに語った理由は、表面的なものでしかなかったことになる。ファンとザンの間にある真実が、何であるかはまだ判らない。だが、たぶんここで語られた感情が真実なら、彼らはカバラス峠の生き残りである元空間機動歩兵達は、勝敗を度外視しても戦いをやめないだろう。

「……それで、俺に何をやらせたいんだ？」

「兵士をひとり喪った。ぎりぎりの人員で作戦を立てていたので、手が足りなくなつて困つてる」

「俺に歩兵の真似事は無理だぜ」

「そんなものは期待していないさ」ファンは軽く肩をすくめて言った。

「あんた向きの仕事を用意してある」

「これが俺向きの仕事だつてのか！」

「ご不満か？ 運転のお仕事には違いないだろ！」

軍用ヴィーグルで荒野を走りながら、ファンは助手席のグエンに怒鳴り返す。

ファンがグエンに与えた仕事は、軍用ヴィーグルの運転手だった。助手席にはファンを、後部荷台やトランクには兵員や戦闘資材を載せ、ファンの指示に従つて、あちらへこちらへと軍用ヴィーグルを走らせていた。

「くそ！ あんたにいいように使われてないか、俺？」

「嫌なら歩いて帰つてもらつてもいいぞ。人里までどのくらいある

「知らんが」

「……………」

何が「人里までどれくらいあるか知らない」だ。世界記録アタック級の標高の峰々に囲まれ、地元民すらろくに近づかない土地からどうやって徒歩で抜け出せというのか。勿論、地元で操縦士パイロットをしている身だけに、おおざっぱな地形くらいは頭に入っている。だが、そこに人間が歩いて通れる道がどう走っているか、までは知らない。確か、>同盟<軍も工事に難航して、最後には軍用道路の開通を諦めたのではなかったか。

唯一可能性があるとするれば、彼ら、「カバラス峠の戦い」の生き残りである空間機動歩兵達の記憶のみだ。彼らはあの戦いの後、歩いて峠から離脱している。

それに土地勘のない自分がひとりで辺りをふらつくより、サバイバルのスペシャリスト集団と行動を共にした方が、生還の確率は格段に跳ね上がる。

問題は、その辺の事情をわきまえたファンにいいように使われるということと、彼ら元空間機動歩兵達は、あの化け物　ザンとの戦闘をまったく諦めていない、ということだった。

ジャイロ機が降りたのは、先刻、ザンを見かけた場所からは、険しい尾根をふたつみつづばかり越えた場所にある山の斜面だ。その間には、登山の素養があるくらいではそうそう越えられない、危険な渓谷がいくつもある。ここにいる連中同様、ザンが山岳歩兵上がりだったことを考えても、普通に考えれば接触まで一日、二日は掛かると考えてよかった。

だが、ファンは、ザンとの接触までの時間を六時間とした。

「あいつに常識は通用しない。こっちの都合で『人間』扱いするな」の一言で、彼の部下たちは納得したらしく、特に疑問を差し挟む様子もなくそれぞれの作業に戻っていった。

限られた時間で戦闘準備を整えるには、指揮官の発言にいちいち疑問を抱いてはやってられない、ということか。

その一方で、グエンに運転をさせて、軍用ヴィーグルで周囲の地勢をざっと見て廻った後、部下たちの配置を指定した。勿論、兵士たちをそれぞれの配置箇所まで運ぶのは、グエンの運転する軍用ヴィーグルだ。

「よし。今のでラストだ。我々はここで待機。戦闘が始まれば、移動しながら指揮を執る。燃料を補給しておいてくれ」

「……兵隊をばら撒きすぎじゃないか？」

軍用ヴィーグルを岩陰に隠すように停めながら、グエンは率直な疑問を口にした。

既に陽も落ちかかっている。ファンの読み通りなら、ザンとの接触は完全に日没後だ。

ファンの行った部隊配置は、ジャイロ機の残骸を底にして大きなU時を描くような形をしていた。前方から来るザンを斜面上に誘い込んで、両翼から銃砲撃を加えて身動きを取れなくし、最終的にはその場で叩き潰すか崖から追い落とすか。そこまではいいとして、わずか十数名の兵士たちを二三人づつに分けて配置していた。これでは、個々の単位でザンに捕捉されれば、すぐに殲滅されてしまう。

「奴の短距離疾走能力は、この車を全力で走らせたときと同じだ。懐に入られたら、次の瞬間には殺られてる。ドウツクルンでそれなりに犠牲を払って学んだ教訓だ。ましてや部隊をまとめて、そこに奴に突つこんでこられたら目も当てられない。」

元より対機人<sup>マシーナリイ</sup>戦闘は、アウトレンジからタコ殴りが定石だ。至近距離での格闘戦になった時点で、勝負はついている」

「奴が別の方角から来たら？ 素直に上から斜面に入ってくれと  
は限らんだろう」

「その場合は、兵の配置を動かす。一部の砲装備以外は、戦闘状況に応じて適宜、動かせるようにしている。そのために、無理をしてこの軍用ヴィーグルを用意して、無線機も全員に行き渡らせた」

ファンが箱型の携行無線機<sup>ウォーキー・トーカー</sup>を手にする。

「今時の兵隊はひとりづつ無線機を持つてるのが普通なのか？」

「まさか。高価だし、周波数の割り当ても面倒になる。現場の兵士一人ひとりが、未整理の情報を電波に乗せても混乱するだけだ。この人数だからやれる話さ」

そんなものか、と思ったが、陸の兵隊の事情を知らないグエンには、ファンの言っている話が妥当なのかどうかもよく判らない。

だが、こちらの疑問に対して即座に論理だった回答を示す姿勢や、部下たちに矢継ぎ早に的確な指示を下す態度を見ると、ある疑問が湧いてきた。

「なあ、あんた」

「何だ」

「何で、軍の物資を横流しなんかしたんだ？」

長い沈黙の末、ファンは苦いトーンで逆に訊ねた。

「……何で、そんなことを訊く？」

「あんたの仕事ぶりを見てみると、仕事の出来ない奴に見えないからさ。部下にも信頼されているようだしな。俺の知っている限り、本業で仕事の出来る奴が不正を手掛けるケースは少ない」

「それは、あんたの知見が狭いだけだろう」

「かもしれないが、だとしたら、あんたの場合はどうなんだ、と思っ  
つてね」

「……………」

しばらく続く沈黙の後、ファンは苦痛を押し殺すような表情で語り始めた。

巷間知られた英雄譚とは異なる、「カバラス峠の戦い」の物語を

## 5（後書き）

決戦に向けた戦闘準備の回です。

何だかんだ言って、結局、捲き込まれて手伝う羽目になってるゲー  
ンは、やっぱりいい人なんでしょうなあ。

次回からしばらく回想編です。

ちょっと長めとなりますが、懲りずにおつきあいください。

更新は来週10月16日（日）の予定です。  
ではまた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8698w/>

---

棺のクロエ1.3 機神狩り

2011年10月9日03時11分発行